

『八月の光』における異人種混交の恐怖

本 間 武 俊

『八月の光』ではミシシッピ州のジェファソンという町が舞台となっていて、主要な登場人物たちの運命のドラマはほとんどまったく余所者たちによって、しかも町の周縁部で演じられている。

リーナ・グローヴという女は、臨月の腹を抱えて、赤ん坊の父であるルーク・バーチという男を捜して、アラバマ州の寒村からジェファソンまで四週間もかけて歩いてやってきて、ここで出産を無事に果たして、再び逃げたバーチの行方を追って、ジェファソンを去り旅を続けることになるのである。

ゲイル・ハイタワーという元長老派教会の牧師は、妻の不品行故に牧師の職を追われたにもかかわらず、さらに町の人々の迫害にもめげずジェファソンを退去することを断固拒否して、世捨て人さながらに、この町に住み続けている。ジョウ・クリスマスという男は、18歳の時に養父を殴り倒して出奔し、その後15年にもわたる孤独な放浪生活の末、ジェファソンに姿を現わす。そして、ジョアナ・バーデンという中年の独身女の屋敷内の小屋に住み着き、彼女と情交を交わすようになる。彼は、自分の体に黒人の血が混じっているのではないかという強い疑惑に取りつかれ、白人の社会にも黒人の社会にも同化し得ない自己意識に苛まれていたのだが、ジョアナが彼を黒人と認めたうえで彼女の仕事の一部を手伝わせようとし、彼に宗教的回心を強く迫ったことから、彼女を殺す。そのために、彼は白人女性を凌辱して殺した黒人として追われ、パーシー・グリムという白人に惨殺される。これは、彼がジェファソンに現われてから約三年後のことである。

このジョアナ・バーデンという女は、北部出身の奴隷制廃止論者である祖父と腹違いの兄を、南北戦争後の黒人の投票権問題をめぐって、この町のサートリス大佐に殺された過去を持つ。彼女は父から黒人に対する罪の意識を植えつけられて育ち、南部の黒人教育に身を捧げてきたが、そのために町の白人たちからは黒人びいきの余所者として白眼視されてきた。この女性が住んでいる屋敷は町外れの木立の中に建っている暗い家であり、その周辺には黒人たちのあばら屋が散らばっているばかりである。ハイタワーの家も、かつ

ては町の表通りだったが、今はさびれ果てた通りにひっそりと立っている。

今、簡単に述べたように、この小説の主要登場人物はみなジェファソンという町の周辺に、孤立して生きる人々であり、社会に反抗する者、社会から排斥された者、あるいは隠遁者であり、根無し草の余所者である。しかし、ジェファソンの人間が一人も姿を表わさないわけではない。リーナ・グローヴに一晚の宿を貸したばかりか、へそ繰りをそっくりくれてやった百姓のアームスティッドの女房、町の地方検事でクリスマスの悲劇を解釈するギャヴィン・スティーヴンズ、下宿屋の女将のビアード、そして町の保安官など、それぞれ実在性を十分に備えた人物も登場するが、彼らは町を代表するような人物ではなく、まったくの脇役にすぎない。そして、こうした脇役たちと主要登場人物たちの間には日常的な交わりや、人間関係と呼べるものがない。

こうしたことから、ジェファソンという町の輪郭が不鮮明になっているとか、そこに生きる人々の生活の詳細とか息吹、あるいはまた習俗といったものが伝わってこない、と言うのではない。実は、むしろその逆なのであって、この小説からは、ジェファソンの町の人々の自己意識（イデオロギー）と異人種混交(miscegenation)の恐怖が鮮明にたち表われてくるのであって、それがこの小説の不思議な面白さになっているのである。クリアンス・ブルックスは、この小説では共同社会から疎外されることによる人間の精神の歪み、倒錯、不毛性が強調されていて、共同社会は人間の行為を審判する‘positive norm’として機能している、と言っている⁽¹⁾。しかし、これは逆である。『八月の光』においては共同社会が先に与えられているのではない。それは、ある種の人間たちを社会の異端者として排斥する行為や、排除された人間たちの精神の歪みや倒錯のなかに、謂ば共同社会の自己意識として投影されているのだ。

I

この小説に登場する女たちは、リーナ・グローヴとジョアナ・バーデンを除けば、夫の虐待に耐えてきたために女の色香をすっかり失った女(例えば、マッキーチャンの妻、ドック・ハインズの妻すなわちクリスマスの祖母、そしてアームスティッドの妻)か、父無し子を生んだ娘(リーナ、そしてミリー即ちクリスマスの母)か、ハイタワーの妻のように夫の幻想世界から排除されて、欲求不満から罪を犯す女ばかりである。アームスティッドの女房は、夫にも仕事にも辛抱強く耐えてきた女で、白髪交じりの髪を首根っこのあたりに乱暴に束ね、持ちのいい鼠色の服を無造作に荒々しく着込み、つっけんどんで乱暴な口のきき方をする。顔は砂岩に彫りつけでもしたような顔であ

り、また戦いに敗れた將軍の顔のようでもある(14-5)。ハインズの妻は夫に「淫婦の母親め」(358)と罵られ、その娘即ちクリスマスの母親は、ハインズが医者と呼ばせなかったために、クリスマスを産んだ後そのまま産褥の床に放置されて息を引き取る。リーナの兄は妊娠した妹を売女となじった(4)。クリスマスを養子として初めて家に迎えたときに、マッキーチャンの妻は既に「すっかり打ちひしがれ、ただ耐えているだけの女で、女だという印は殆ど無く、白いものが交じり始めた髪をきちんと束ねているのと、スカートを履いているのが、わずかに女らしさを示していた。無情で頑迷な夫によって……執拗に繰り返されし打ち叩かれてきた結果、……声にならない希望と裏切られた欲望との脱け殻と化しているかのようだった」(155)。クリスマスの初恋の相手のボビーは場末の娼婦であり、男の欲望の捌け口にすぎない。ハイタワーの母親もまた、ピューリタンで奴隷制廃止論者の夫の厳格で非妥協的な原則の犠牲になって、命を縮めた女であった。

これらのエピソードは何の脈絡もなくテキストの中に散在しているのではない。これらは相まって、女の声を沈黙させようとする力が社会の中にあることを示しているのである。

こうした女たちは、男によって虐待にも等しく徹底的に支配されている。こうした男による女性支配の裏には男の側の女性不信——女性を危険なものに見なす固定観念——がある。女性は男性より劣るものであり、悪や罪を引き寄せるものであると見なされている。例えば、ハイタワーにとっては、「女は、神が創造した無名の柔順なものであり……、女こそ、彼の肉体の種だけでなく、彼の魂の種をも容れる器である」(441-2)。クリスマスの祖父ドック・ハインズは、「娘は神から父を授かったのだから、娘が父親の言いつけを聞くのは当然だ」と信じていたが、娘の妊娠を知って「神の憎悪が女に表われるのを娘の服の下の体に見る」(353)。

一方、女たちのほうにもそう思われても仕方がないところもある。リーナは窓から抜け出して男と逢引を重ねた結果、妊娠したのだったし、クリスマスを産んだ娘はサーカス団の男に、出会ってから数日もしないうちに身を任せただけで、そういう結果になったのであった。だから男たちは、女たちの行動をしっかりと制限し自由奔放な行動をさせないようにするために、言葉による命令は勿論、しばしば暴力にも訴えるのである。マッキーチャンは、妻がクリスマスをかばって嘘をついたことを見破って、厳しく妻を叱責する。

「跪け、跪け、跪くんだ、女め。神にお恵みとお許しをお願いしろ。このわしにではなく」(155)と。ドック・ハインズは、娘の出産が迫ったので医者

を呼びに行こうとした妻を、銃身で殴って家から出さなかった (358)。男の暴力は女に奮われるだけではない。ハイタワーは、黒人の料理女との間で神と自然に背く行為をしたとか、さらに料理人に雇った黒人の男との同性愛を疑われて、町の男たちから暴行を受けたことがある。この場合町の間人たちはハイタワーを正常な男と見なさなかったからである。クリスマスは白人女性を犯して殺害した黒人と見なされて、パーシー・グリムの手で無残に殺される。このように暴力は社会の異端者に対しても等しく振われるのだ。グリムは、白人は他のあらゆる人種より優秀で、アメリカ人は他のあらゆる白人種よりも優秀だと信じている、人種主義者である。それ故、黒人が白人の女を犯し殺害したという事件は、白人支配の根幹を揺るがす出来事である。このような黒人は社会にとって許し難い存在である。社会を浄化するために、このような黒人を殺さなければならないのである。ジョアナ・バーデンは、黒人は神に呪われた存在であり、その黒人を持ち上げて行かねばならぬ白人は黒人に呪われている、という信念を抱いているが、これはニュー・イングランド出身のピューリタンで奴隷制廃止論者であった祖父からバーデン一族が代々受け継いできた信念である。クリスマスの祖父のドック・ハインズは、しばしば礼拝中の黒人の教会へ乗り込んで説教壇に上がり、黒人たちにむかって白い肌をした全ての人々のまえに身を低くせよと説教したことがあった。だから彼もまた実の孫であるクリスマスをリンチにせよと、町の人々を扇動するのだ。『八月の光』の中では、女性の抑圧（性差別）と人種差別そしてピューリタニズムは一体となって、父権性社会のイデオロギーを形成しているのである。また、この社会は人間を人種、性差、階級によって厳格に区分けし、異端分子を排除する自閉的社会である。このような社会に生きる人間のアイデンティティと行動規範は人種、性差、階級によって定められていて、人間は白人であるかさもなければ黒人である。どちらでもない人間などは存在しえないのだ。このような社会にクリスマスは生を受け、この社会が彼の命を奪ったのである。

II

『八月の光』で、最も強い女性憎悪を表わしている男はジョー・クリスマスである。しかも彼は自分の体内に黒人の血が流れているかもしれぬという疑惑に取りつかれている。彼のなかでは性差別と人種差別の意識が渾然一体になっていて、そのために一層女と黒人に対する憎悪は激しいものとなっている。しかし、テキストの何処を見てもクリスマスの黒人の血についての確証はない⁽²⁾。乳飲み子のクリスマスを孤児院の入口に置き去りにし、その上

そのボイラー一番に首尾よく納まった狂信的な祖父ドック・ハインズは、そのことを固く信じているが、それとても確実な証拠に基づいてのことではない。間接的な伝聞によっているだけなのだ。にもかかわらず、クリスマスがこうした疑惑を抱くに至ったのは、他人からそう言われてきたからなのだ。孤児院にいた頃に、彼は仲間の孤児たちから「黒んぼ」(nigger)とはやしたてられていた(119)。こうしたクリスマスはハインズは憎悪の眼で監視し続けていたので、幼いながらもクリスマスはそれを意識していた。だから「黒んぼ」という言葉と自分との間には何か繋がりがあると、うすうす知っていたのかもしれない。

自分が運動場にいるときには、決まってこの男がボイラー小屋の戸口の椅子に座って自分を見張っていることを、しかも一瞬たりとも目を離さないで見張っていることを知っていた。……これでもしもっと年をくっていたら、おそらく彼はこう思っただろう。あの男はおれのことをひどく憎んでいる おれをひどく恐れている……彼がもっと言葉を知っていたら、あるいはこう言ったかもしれない、だからおれはほかの子供たちと違うのだ あの男が絶えず見張っているからなんだ

(129)

クリスマスは栄養士の部屋に練り歯磨きを盗み食いしに入った時に、彼女と若いインターンの情事をカーテンのかげから聞いてしまう。情事の現場をクリスマスに見られたと思って取り乱した女から、“You little nigger bastard !”と 罵られる(114,117)。これはクリスマスが五歳の頃だ。同じ頃に、孤児院の庭で作業していた黒人に「黒んぼ」という言葉の意味を尋ねたときに、その黒人から「おまえは黒んぼよりももっとひでえ人間だ。おまえは自分が何だかわかっちゃいねえんだ。それどころか、いつまでたってもわかりっこねえんだ。……」(363)と言われたことがあった。情事(性)の何たるかも「黒んぼ」という言葉の意味も、幼いクリスマスに分かるはずはないが、それでも、彼の意識の底に深く沈澱し内面化されていったことは間違いない⁽³⁾。これが意識の表面にようやく浮かんでくるのは、彼が14歳の時に仲間の少年たちと黒人娘を輪姦しようとしたときだ。

このとき彼は、女の匂い、黒人の臭いをかいで、何かが喉元に込み上げてくるのを感じる(147)。この感覚は、幼いクリスマスが栄養士とインターンの情事の物音を聞くとともに聞きながら、カーテンの陰で女の衣裳の匂いに

包まれて嘔吐したときの感覚とよく似ている。それから、クリスマスは黒人娘と交わるどころか、この娘を狂ったように蹴り、殴る。それは、女の目に何か卑しいものを見たと思い、「暗い井戸」のような目の底に「死んだ星が映っているような、二つの小さな光り」を見たからだ。女の悲鳴を聞きいて駆けつけてきた少年たちと激しい殴り合いのすえに、彼は取り押えられて、「男の臭い」をかき「清々しい」(hard and clean) 風が吹きすぎていくような気がするのだ。

彼のこうした不可解な行為を後から振り返ってみれば、この時クリスマスの意識下では、女と黒人に対する嫌悪がおぼろげに芽ばえ始めていたのではないかと想像されるのである。また、自分の体のなかに黒人の血が流れているかもしれぬという疑惑が芽ばえだすのも、この時ではないかと考えられるのだ。何故ならば、17歳のときには養母のマッキーチャン夫人の優しさが疎ましくて、自分の黒人の血のことを彼女に教えてやろうかと思うからだ(157)。彼は5歳でマッキーチャン夫婦の養子になっている。不可解なことには、孤児院の院長はクリスマスの血筋に一抹の疑惑を抱きながらも、敢えて白人の家に里子に出したのであった。マッキーチャンは頑迷で狂信的なカルヴィニスト(長老派)であり、クリスマスにピューリタンの信仰と勤労の尊さを叩き込む。幼いクリスマスが教義問答を暗記するまで、食事も与えず鞭で打つ。しかしたとえ鞭打たれても、クリスマスは決して暗記しようとはしない。つまり彼はピューリタンの倫理を受け入れようとはしない。マッキーチャン夫人が夫に隠れて運んでくれた食事さえも拒絶して、マッキーチャンに屈服することを拒むのである。こうしたことがあったある一日を思い出して、彼は「この日おれは男になったのだ」(137)と言う。

クリスマスは養父の宗教を拒絶するが、その一方で養父と同じような女性観を受け入れる。マッキーチャン夫人は、模範的な優しい養母たらんとして、無器用に空しく努力を積み重ねる。彼女はクリスマスをかばい、彼のためにこっそりと食べ物を用意して、マッキーチャンに隠れて食べるように勧めたり、自分とクリスマスとの間で取るに足りない秘密を共有しようと試みたりする。彼女のそうした努力もクリスマスの目から見れば、彼とマッキーチャンとの厳格で公正な男同士の関係に嫌な後味を残すだけだった。マッキーチャンは、クリスマスのある一定の善行悪行に対しては必ず一定の反応を示し、賞罰をもって報いる。一方、女は秘密めいた得体の知れない存在で、その行動や反応は予測不可能である⁽⁴⁾。女は秘密を好む特有の本能から、取るに足りない無邪気な行為でさえも、かすかに忌まわしい悪の色合に染めないで

はおかない (158)。クリスマスは、マッキーチャンの苛酷で無情で公正な扱い以上に、夫人のそうした好意と親切を憎んだ。夫人（女）の優しさを受け入れることはマッキーチャンに屈服することであり、それは結局自分の男性性を危うくすることに繋るからだ。夫人がクリスマスをかばって嘘をつきマッキーチャンに叱責されているのを聞きながら、クリスマスは思う。「あの女、俺を泣かせようとしてやがった。俺を泣かせさえすりゃ、自分たちの思うとおりになるって、考えてやがるんだ」(158)。彼はマッキーチャンの苛烈な正義に対して弱音を吐くところを見せたくなかったのだ。女々しさを人に知られたくなかったのだ⁽⁵⁾。彼が憎んだのは重労働でも懲罰でも不当に取り扱われることでもなかった。問題はマッキーチャン夫人だった。彼女の優しい親切心だった。彼は自分が永久にその犠牲となる運命だと思い込み、男たちの苛酷な正義以上に女の親切を憎んだ。

前に述べたように、クリスマスは8歳の年のあの日曜日を回想して、「この日俺は男になったのだ」と言った。しかし実は、彼はマッキーチャン夫人に取り込まれることを恐れていた。女の世界に呑み込まれることを恐れていたのだ。しかし男としてのクリスマスの主体は、マッキーチャン家にいた間も、出奔してからも、遂に確立されることはない⁽⁶⁾。女性を蔑視し嫌悪することと、女は男の主体形成を危うくするものという観念がクリスマスに刻印されたただけだ。

クリスマスが養父マッキーチャンのもとで受けた教育は、まったく白人のものだった。従って、彼の価値観も判断基準も全て白人のものである。黒人に対する偏見の芽は祖父ハインズの憎しみに満ちた眼差によって、白人プロテスタント男性としての厳しい行動様式と強い女性蔑視は養父から、それぞれ植えつけられたのだ。こうして彼は人種主義者、性差別主義者となった。更に、養父のキリスト教倫理には全く背を向けながら、その狂信的ピューリタニズムにこそ男性としての自己に釣り合うものを感じている。クリスマスのそうしたところはピューリタンの的である。それは、教義問答集を暗記することは断固として拒否しながらも、そのことに対する罰は当然のこととして甘受するところに、はっきりと見られる (137-143)。また成人してからは、体に黒人の血が流れているかも知れないという疑いのために、外見は白人そっくりなのにもかかわらず、白人として世間を渡ることがどうしてもできないというところも、また明らかにピューリタンの的である。

III

クリスマスは18歳の年、町のレストランの女給兼娼婦ボビー・アレンによっ

て、性の世界を知る。この恋が始まる数年前クリスマスは仲間の少年から女の生理について聞かされ、衝撃を受け、谷間の人目に付かないところへ行っ
て羊を射殺し、その血に両手を浸して「免疫性を購うために」(176)一種の浄
化の儀式を執り行って、女との愛の関係に入るための覚悟をしたのだった。

彼はあの少年が教えてくれたことを忘れてはいなかった。彼はただ
その事実を認めた。彼はそれとともに、それと一緒に生きていけると
思った。必死になって心を落ち着けて、こんなつじつまの合わないこ
とを思ったようだ。よし。それならば、そのとおりだろう。けれども、俺には
そんなことはない。俺の人生にも、俺の恋人にもそんなことは起こらないのだ。

(174)

ボビーとの恋の破局がクリスマスの悲劇的人生を決定する最大の契機にな
るが、その恋の始まりは世間知らずの若者の純粋な恋であった。

俺はまだ知らないが、……物思わしげなとり澄ましたあの女の顔……
青春の欲望のつかみ所のない魔力に彩られて、ひたすら待っているあ
の顔。……あの顔には愛を芽ばえさせるものが既にある。三年前にな
ぜ俺があの黒人娘を犯さないで、殴り飛ばしたか、そのわけを今……
俺は知っている。あの女も知っているはずだ。それを誇りに思ってい
るはずだ。そして、誇らかに待っているはずだ。

(165-6)

しかし初めてのデートの夜にボビーから生理になったことを知らされると、
再び激しい衝撃を受けて森に駆け込み、一列に並んだひび割れた壺から「死
の色をした汚らしい液体がどろどろと流れ出している」幻を見ながら、嘔吐
するのである(177-8)。そして初めてボビーの性を知ったのは、まさしくこの
壺の幻を見た場所であった。こうしてみるとクリスマスは女性（性）に深い
恐れと嫌悪を感じていたと考えられる。神学校時代のハイタワーが妻にと決
めた女性の顔を一方的に美しいと決め込んで、その女性の現実の顔が決して
見えなかったように、クリスマスも一種自己愛的なイメージで女を見ていた
のだ。だからそうしたイメージから外れた、異様な他者としての女の一面が
露わにされると、こうした反応を示すのである。彼もまた、クエンティン・
コンプソンやホレス・ベンボウのように、他者としての女性に怯える男の一

人なのである。フォークナーの小説において、女は男の幻想が投影された存在である場合がしばしばある。彼女たちは男の自我のなかにある他者性——男が、無意識に、認めまいとして抑圧している自分自身の欲望と恐れ——を表わしている。ジョアナ・バーデンとの関係の「第二の段階」で、彼女が恋に狂う女に変身して、エロティックな狂態を次々に表わすに至ると、クリスマスはそうしたジョアナの姿態に「黒い深淵」のようなものを見、あたかも自分が底無し沼に吸い込まれていく男に見えて、怯えるのである。

この時はまだ、クリスマスはボビーが娼婦であることを知らない。また自分の体に黒人の血が流れているかもしれぬとしても、それが現実社会でどんな意味を持つかということについても、なにも知らない。ただ、黒人娘を拒否したことを振り返っているところに見られるように、大事なことは相手の女が白人の清らかな娘でなければならないことだ。言うまでもなくボビーは娼婦であるが、クリスマスは初めそのことが見抜けなかった。一目見ただけで、妊娠したリーナに恋をしてしまうバイロン・バンチが、一方では不可解なことに白人の処女を理想の伴侶と考えていたように、クリスマスも白人男性として理想の女性を思い描いていたのだ。つまり彼の意識は白人男性の意識だったのだ。たとえ寝物語の合間に、自分に黒人の血が入っている可能性をボビーに話したのも、それがまだ彼のアイデンティティを脅かすものにはなっていなかったからである。彼は養母のへそ繰り金を盗み、夜な夜なロープを伝って窓から脱け出し、彼女と密会を重ねる。やがて彼はボビーが娼婦であることを知り驚愕するが、しかしこの事実をも女の生理と同じ様に受け入れて、売春宿の常連と交わって酒や煙草を覚え、彼らの物腰までも身に着けていく。

ボビーと出かけたダンスの会場にマッキーチャンが乱入し、ボビーを淫売女と罵り、会場は大混乱になる。そのなかでクリスマスはマッキーチャンを椅子で殴り倒し(恐らく殺し)、ボビーと逐電してどこかで結婚しようと家から金を盗んでくるのだが、マッキーチャンに淫売女と罵られたことでボビーはヒステリーを起こしていて、クリスマスを黒人呼ばわりして激しく罵る。

こいつはね黒んぼだと自分から言ったのよ！ちくしょう！黒んぼのちくしょうたら、あたしに口ハでやらせておきながら、土百姓のおまわりに追われるような目にあわせやがったんだから。

それはクリスマスにとって衝撃的な認識であった。彼は「一陣の風」に吹かれるような心地でボビーの金切り声を聞く。思い返してみれば、孤児院の女栄養士はインターンとの情事を幼児のクリスマスに聞かれたと思い込んで、「黒んぼ」と彼を罵ったのであった。ボビーもまた、こうした厄介ごとに巻き込まれそうになると、その責任をクリスマス即ち「黒んぼ」に転嫁するのである。後にジェファソンの住人たちが殺されたジョアナを見るや立ち所に、それを黒人の犯行と断定してしまうように、罪や穢れは黒人に押し付けられるのである。こうして彼は「黒んぼ」ということが彼自身のアイデンティティを左右する大問題であることに目を開かせられたのである。

この事件のあとアメリカ中を放浪してジェファソンに流れ着くまでの15年間に、クリスマスは白人の女と寝たあとで、しばしば俺は黒人だと口走ることになる。白人の女にたいしては黒人であることを、黒人の女にたいしては白人であることを意識せざるをえなくなったのだ。こうした意識によって性行為は二重に忌まわしく呪われたものとなった。黒人を客として平気で取る白人の娼婦さえもいることを知って、激しい衝撃を受けたこともある。また黒人女と同棲して黒人になろうと試みたこともあったが、どうしても黒人にはなれなかった。彼の肉体も精神も黒人を受けつけないからだ (212)。

ジョアナ・バーデンがクリスマスに「人間は自分が生まれた土地から教えこまれたように行動するほかない」(241)と言っているように、クリスマスは男性支配と人種差別の社会に生まれ育ったために、女性を蔑視し、黒人を嫌うのである。この社会には一方には命令を下し支配する者がおり、もう一方には隷属する者がいる。支配者とは白人の男性であり、被支配者は女と黒人であり、社会的には一段と低く見られるか、あるいは蔑視されている。クリスマスが女と黒人を嫌うのは、彼らがそのような意味で弱者であり、白人男性に支配される犠牲者であるからだ。その上クリスマスのアイデンティティはこうした社会では大変微妙なものになる。彼はどこから見ても黒人には見えないが、内心では黒人であるかもしれないと疑っているからである。しかも、彼は18歳までは白人として育てられてきたのだった。だから、自分が白人(支配者)に属すべきなのか、黒人(被支配者=弱者)に属すべきなのか、本人にも決しかねている。14歳のときに彼が黒人娘を猛烈に蹴ったり殴ったりした理由の一つは、すでに別の少年と性交を終えて意志のない肉そのもののよう横たわりながら彼を誘う黒人娘(黒人=女=娼婦)に、白人男性が最も軽蔑しかつ忌み嫌う弱者(被支配者)の象徴的存在を見たからであった。つまり、クリスマスにとって最も忌まわしく悍ましい存在は“womanshene-

gro” (147) なのである。

IV

クリスマスの悲劇の原因は自分がパート・ニグロであるかどうか分からないというところにあるのだが、それでもクリスマスという人物によって黒人差別が問題として扱われているのではない。先に述べたように、果たしてクリスマスがパート・ニグロであるかどうかの問題はテキストの内部では決定できない。彼はどこから見ても白人にしか見えないし、黒人のような態度を見せることもない。ところが、クリスマスを黒人と見なす白人の人種主義者にとって、これは最も許しがたいことなのだ。

奴の態度ときたら、黒んぼのようでもなけりゃ、白人のようでもねえ。
そこなんだ。そこんところがみんなの腹の立つところなんだ。

(331)

どこから見ても白人そのものに見える黒人の存在は、白人と黒人の差異を曖昧にするものであり、したがって人種差別のイデオロギーに挑戦する危険な存在である。クリスマスは人種主義の根拠の脆弱さを身をもって示している人間であり、人種主義者にとっては生きている悪夢にほかならないからだ。

クリスマスがジョアナを殺したのは、彼女がクリスマスを「黒んぼ」と規定した上で、彼の更生を図ろうとしたからであり、神に祈ることを強制したからであった。クリスマスは「女が……彼自身の生活をも変えてしまって、しかも彼を隠者に、黒人のための布教師に仕立て上げようとしていることを、人には絶対に知られたくなかった」(256-7)。ジョアナを殺すことは、黒人というステレオタイプを自己に課することを拒否し、女の支配に屈することを拒否するための行為であるはずだったが、それは皮肉なことに町の人々に彼自身を黒人だと思いこませる結果となる。剃刀で喉を掻き切られたジョアナの死体が発見されるや即座に、人々はこれを黒人の犯行であると極め付けてしまう。だから保安官が黒人を連れてこいと命令するのは、黒人から情報を得られると信じていたからだ。こうした一種の大衆ヒステリーこそクリスマスを黒人だと極め付ける心理的条件にほかならない。ブラウン（ルーカス・バーチ）の一言でクリスマスを黒人だと信じてしまうのは、保安官ばかりではない。バイロンもハイタワーも町の食料品店の店主も地方検事のギャヴィ

ン・スティーヴンズでさえも、黒人に対する先入観、固定観念という点において、大同小異なのである。

クリスマスは白人であり同時に黒人でもある。ということはそのどちらでもないということでもある。だから彼は南部の社会が彼に押し付けんとする人種主義のステレオタイプを拒否し続けてきたのだった。しかし、それはクリスマスが黒人でも白人でもない、一個の人間としての自己の確立を目指していたというのではない⁽⁷⁾。むしろ、彼は黒人であるかもしれぬ可能性に怯え、黒人になること（黒人にされること）を生涯かけて避けてきた人間であると言うべきであろう。更に言えば、彼は異人種混交（miscegenation）、とりわけ白人と黒人の雑婚に対する白人社会の不安を代弁している男ではないだろうか。人種差別のイデオロギーが外側の社会にも彼の内側にも存在するかぎり、白人でも黒人でもない人間を志向することは、現実には不可能であり、そのような人間が生きられる場所は何処にもないはずだ。

ジョアナ・バーデンを殺すと決意した夜に、クリスマスは白いシャツに黒いズボンという彼自身を象徴する出立ちでジェファソンの町を歩き回る。この彷徨は彼の30余年の人生のまさに縮図と言うべきである。何時の間にか、彼は暗い黒人居住区に入り込んでしまったことに気づく。すると四方から黒人たちの匂や熱っぽい声が彼を包み込むように押し寄せてくるような思いがする。彼の内部にも、黒人女の生殖力に富んだ、豊かで柔らかな声が呟いているような気がして、まるで彼をはじめ男の形をした全てのものが、暗くて、熱い湿った、根源的な「女」の体内に戻ってしまってもしたようだ。だから、このことに怯えたクリスマスは目を怒らせ歯をむき出して、黒人居住区を駆け抜け、白人街に逃げ込む。すると、辺りの空気は一変して「冷たく固い白人の空気」(107)に変わり、彼は冷静になる。電灯が明るくともる白人の家並の間を心静かに歩くことができるのである。そうした一軒の白人の家のヴェランダでランプに興ずる人々を眺めながら、彼は独り思う。

『俺が欲しかったのはあれだけなんだ』と彼は思った。

『そんな大それた望みだとも思えんが』

(108)

それから彼は丘に上り、頂きから町を見下ろす。丘を下って、また黒人居住区に差し掛かると、数人の黒人に出会う。クリスマスは彼らの行く手に立ち塞がる。黒人の一人がクリスマスに尋ねる。「何の用かね、白人さん。誰か人

を探しているんかね」(109) と。黒人が立ち去ると、どこからともなく涼しい風が吹いてくるような気がする。気がつくと、クリスマスは手に剃刀を握りしめていた。この出来事は彼のこれまでの人生が如何なるものであったかを簡潔に語っている。この黒人の問いは、そのまま、自らのアイデンティティを求めて放浪してきたクリスマス自身の問に他ならない。また無意識のうちに剃刀を握りしめたのは、その黒人に対する単なる恐れからではなかった。それはクリスマス自身の中の白人がクリスマスの中の黒人の部分に振り向けた憎悪なのである。これまでクリスマスは黒人であるかも知れぬ可能性に怯えてきた。黒人、とりわけ黒人女に対する彼の憎悪の源は、こうした可能性に対する恐れにあったのだ。クリスマスは異人種混交 (miscegenation) の恐怖を身を以って生きた一人の人間 (白人) に他ならない⁽⁸⁾。

それでは、白い黒人クリスマスを犠牲に供することによって、ジェファソンの人々は禊を果たしたのだろうか。これによって miscegenation の恐怖から解放されたと言えるのだろうか。否、それは払拭し切れていないのだ。

『八月の光』の中には奇妙な態とらしいエピソードが一つある。リーナ・グローヴはかつてクリスマスが暮していた小屋で出産する。この時、ハインズ夫人つまりクリスマスの祖母はリーナの赤ん坊を自分の孫のクリスマスであると錯覚してしまう。そしてリーナさえも赤ん坊の父親がクリスマスであるかのように思われて、不安に駆られるのである。またこの同じ日の午後にはクリスマスはパーシー・グリムに殺され去勢されるのである。リーナの出産を手助けしたハイタワーは焼け落ちたバーデン屋敷のあった木立を眺めて、ジョアナを「あわれな不毛な女」と呼び、その不毛の土地に今リーナによって「幸運と生命」が蘇ったと考える。これはいかにもクリスマスがリーナの赤ん坊として再生したと思わせる結構である。

それではリーナの子供はクリスマスのような悲劇的な運命を免れていると言えるだろうか。この子の父親であるルーカス・バーチ (ブラウン) については、肌が浅黒い (dark-complected) と言われている (46、50)。一方、クリスマスの顔の色については羊皮紙のような (parchment color あるいは parchment-colored) 色と言われている (30、112、115、139、262)。こうしてみると両者の肌の色は殆ど同じと考えてもよいだろう。とすれば、クリスマスを黒人と見なしルーカスを白人と見なす根拠はあやふやなものになる。ルーカス・バーチは何処の馬の骨とも知れぬ渡り者 (hobo) である。クリスマスの父は旅回りのサーカスの団員であった点で、ルーカスと同じ様に渡り者であった。だからリーナの子供に黒人の血が流れていると思われても、少し

もおかしくはないだろう。リーナにとっては（そしてハインズ夫人やバイロン・バンチにとっても）子供の父親の正体などは少しも問題ではないようであるが、人種主義が存在し絶えず犠牲者を必要とする社会が続くかぎり、リーナの子がクリスマスと同じ運命を辿らないという保証は何処にもない。

ジョアナ・バーデンの祖父キャルヴィンはユグノーの娘と結婚し、息子（ジョアナの父）を儲けた。キャルヴィンと息子のナサニエルの外見には似たところが殆ど無く、「まるで人種を異にしているように見えた」（229）。キャルヴィンは背が高く北欧型であった。それに対してナサニエルの体格は母親譲りで、小柄で肌は浅黒かった。このナサニエルは自分の母親そっくりのメキシコ人の女を妻にする。そして彼らの息子も肌が浅黒かった。これを見たキャルヴィンは「何ということだ、色の黒いバーデンがまた一人増えたわけか」と、憤慨に堪えぬ面持で言う（234）。このことはバーデン一族のなかに南欧系の血が流れていることを意味するだけではない。キャルヴィン・バーデンの狂信的な信念によれば、南欧系の人間もまた有色人種の一つなのだからだ。

背が低くて色の黒いやつらめ、地獄に落ちるがいい——やつらの背が低いのは、神の怒りが重荷となっているからだ。色が黒いのは、人間を奴隷にした罪がその血と肉を汚しているからだ。

(234)

従って、バーデン一族においても、隠微で曖昧ではあるが、miscegenationの疑惑があるのだ。ところで、クリスマスの父は、確証はないのだが、メキシコ人だとも黒人だとも言われていた。さらに、クリスマスの祖父母のハインズ夫妻は「普通の男女より少し背が低く、人種が違う」のではないかと、モッツタウンの人々から見られていた(322-3)。こうした場合を考え合わせると、miscegenationに対する疑惑と危惧がこの小説の至るところに潜んでいると言えるのである。そしてこうした疑惑と危惧は、黒人と白人の混血に対する恐怖として、クリスマスという人間像に形象化されているのである。再び、この問題は *Absalom, Absalom!* (1936) において、また *Go Down, Moses* (1942) において、南部の歴史に深く絡まるものとして追求されることになるだろう。

〔注〕

テキストからの引用、言及は全てWilliam Faulkner, *Light in August* (New York, Random House, 1959) による。

(1) Cleanth Brooks, *William Faulkner : The Yoknapatawpha Country* (Yale Univ. Press, 1964) p.69

(2) 『八月の光』の手書き原稿やタイプ原稿を詳細に照合、分析して、作品の成立過程を跡付けたFadimanの研究によれば、クリスマスのアイデンティティは意図的に曖昧にされている。Regina K. Fadiman, *Faulkner's Light in August : a Description and Interpretation of the Revisions* (University Press of Virginia, 1975) p.42

(3) クリスマスにおける女性憎悪と黒人憎悪について、この練り歯磨の一件にまで遡って、精神分析的観点から綿密に分析究明したブレカスタンの論は最も刺激的で示唆に富む。André Bleikasten, "Version of the Sun", *The Ink of Melancholy : Faulkner's Novels from The Sound and the Fury to Light in August* (Indiana Univ. Press, Bloomington and Indianapolis, 1990) pp.276-351

(4) 例えば、孤児院の栄養士はインターンとの情事が漏れることを恐れて、クリスマスに1ドル銀貨を握らせて口封じを計ろうとする。しかしクリスマスの方では厳しい罰が下されるのを待っていたのである。(115-7)

(5) ジェファソンの町の人々は、証拠もないのに、クリスマスとルーカス・バーチの間柄を男色関係ではないかと噂していた。(304)

クリスマスにはホモセクシュアルの気味や女性的要素があると言う研究者もいる。Brooks, *ibid.*, p.57, Doreen Fowler, "Joe Christmas and "Womanshenegro"", Fowler, D. & Abadie, A. J. Eds., *Faulkner and Women : Faulkner and Yoknapatawpha* (Univ. Press of Mississippi, Jackson and London, 1986) p.147

(6) ブルックスは、『八月の光』の基本的主題は女の和やかな世界の上位に己の自我を超然とした確固たるものとして打ち立てんとする、男の不自然な企てにあると言う。Brooks, *ibid.*, p.68

(7) Kazinはクリスマスが「人間になることを求める一つの抽象概念である」と言う。Alfred Kazin, "The Stillness of Light in August", Hoffman & Vickery eds., *William Faulkner : Three Decades of Criticism* (Michigan State Univ. Press, 1960) p.252

(8) Sundquistはmiscegenationを恐れる言説が南部の社会に流布していたことを、多くの大衆小説を挙げて例証している。

Eric J. Sundquist, *Faulkner : the House Divided* (Johns Hopkins University Press, Baltimore and London, 1983) pp.71-3